



明化の教育

10月号 (第449号)
平成29年9月29日
文京区立明化小学校
校長 溝畑 直樹



「教育」・「共育」・「今日育」

ー今日、自分は「育つ」・自分を「育てる」ということを「教える」ー



副校長 齋藤 道子

遠く澄み切った青空や、校庭を横切る赤とんぼの姿に、さわやかな秋の訪れが感じられる頃となりました。2学期がスタートしてから早一ヶ月が経ちますが、子供たちは今、9月30日の運動会に向けてそれぞれに練習に取り組んでいます。

運動が好きな子、苦手な子、自信がある子、自信がない子、友達と共に取り組める子、できない子等、様々な子供の心の様子が具体的な姿となって表れます。

昨日まで前向きに取り組んでいた子が、今日は元気のない顔で練習に出るのを拒みます。理由を聞いても自分の気持ちや感情の不快さの原因をなかなかうまく言葉で伝えることができません。そんな時は、しばらく時間をおいて様子を見ますが、時間にこそ差はあれ、どの子供にもそうした姿の背景には、必ず何らかの理由があることが分かります。

家庭でも学校でもそうですが、日々忙しい生活をしておりますと、子供が自分の心を見つめ、それを整理して言葉に出すまでの過程に十分に寄り添えないことがあります。「早くして！」

「時間がないんだから！」「後にして！」そんな言葉が、つい大人の口から躊躇なく出てしまいます。そうすると子供は、自分でもよく分からない不快感を抱いたまま、既に設定された様々な予定に沿ってその時々を過ごしていきます。

9月の「明化の教育」で、溝畑校長が「立ち止まって自分を見つめる・考える」ことの大切さをお伝えしましたが、私自身も改めて時間に流されるのではなく、その時々を自分自身というものを常に意識し、感じ、考えながら、自分の心に向き合って「生きる」ことがとても大切なように思います。

「子供を育てる」という立場にある私たち教員や保護者は、子供の将来にとってよいこと、必要なこと、ためになることを教え・導き・育む「教育」を常に意識して子供に接しています。しかし、時には、大人の視点から180度転じて子供の視点に立って、子供の内面に息づいている成長の芽に目を向け、耳を傾けていくことが大事だと思います。そこには、「将来を案じ、よりよく生きる」ことを考える大人とは異なる、「今を一生懸命に生きている」子供の成長の姿が見えてきます。たった一つのかげがえのない子供たちの「いのち」の成長は、どれとして同じものはありません。「子供を育てる」ことは、一筋縄ではいかない大変なことですが、子供たちは、無意識的に刻々と確実に成長しています。そして、大人がその子供の成長を積極的に認め、励ますことで、子供は自らの成長を実感し、「自分は育つ」存在であることに気付いていきます。また、その気付きを基に成長に伴って主体的に「自分を育てる」ようになっていきます。今日も自分は「育つ」、そして今日も自分を「育てる」、そんな風に子供たちが思える「今日育」も大切にしていきたいと思っています。

